第26回全国大会への想い

How We Conducted the 26th Annual Conf. of the Japanese Society for Artificial Intelligence

阿部 明典
Akino Abe
Chiba University.
ave@ultimaVI.arc-net.my, http://ultimaVI.arc-net.my/ave/

本年度は第26回全国大会を大学実行委員会を担当することとなりました。また25人しか体験していない非常に貴重な機会であり、大会の成功、失敗も左右するかもしれない緊張する役割でもあります。さらに、25という数字は25に続く数字として非常に意味があります。次のご四半世紀に入ることを知ったのです。昨年は、記憶にまだ新しい東北地方を襲った震災の影響で直前まで開催の判断を遅らせたりしたので、かなり厳 Wig も開催でした。結果的に、地元盛岡市や岩手県立大学などの熱い支援のもと、多くの参加者を集め、成功裏に終わり、同時に学会の第一四半世紀の終わりでもありました。そして今年から人工知能学会は新しいフェアズに入りたいと考えてよいと思います。

まずは、大学の概要を書きましょう。今年は、6月12日（火）から6月15日（金）にかけて、室町時代には大内文化が花開き、西の京と呼ばれて、現在でも、国宝三筆の塔を有する瑞隆寺など、まだその香りがどこどこに残っている山口市で行いました（図1）。大会にテーマを付けるのも初めてだそうです。テーマは「文化、科学技術と未来」とされました。山口という歴史の重みを感じる環境で議論や交流を行い、古くからある文化を体験し、刺激を受けることで、新たな発想が生まれてくるという意味を込めました。

メイン会場は、近接しているといいながらもそれぞれ別棟の山口県教育会館（図2）、ゆ～いプラザ山口県社会福祉会館（図3）、山口県自治会館（図4）という独立した3施設を使いました。さらに、後述しますが、やや離れた2施設、みやび館、赤れんが館を使いました。

メイン会場のあたりは、県庁、市役所などのある行政地区ですが、非常に落ち着いた場所でした。そこから少し歩くと、夕べには堂々と水うるしきことができる一の坂川。その近辺には、おしゃれなカフェなどが並び、お昼は時間の経つのを忘れたくらいゆっくりと過ごすことができる場所です。その先には後述する2施設があります。

一方で、近隣には、瑞隆寺だけではなく、今も時間帯が折り合わずにお使いができた茶香亭（図5）があったり、今も使われているようでも、ややモダンになってきていますが、サビビル教会（図6）もあります。そして、やや離れていますが、雪舟庭（図7）のある常栄寺もあり、歴史を感じることができる場所でもありました。

メイン会場からバスで10分程度、徒歩で30分程度の遠隔町は、築田温泉（図8）となっており、夕方は、山口の美食を楽しんだ後、昼間の議論の疲れを温泉でゆっくりと満たすことができるのである場所ではないかと思います。

また、夕べのグラウンド（図9）もあり、簡単に温泉を楽しむこともできます。

移動の時間を考えて、会議の行われた場所のそばで宿泊された方も多いらしいと思われます。会議と休息の空間がうまく入れてあることも一つの特色であり、夜の散歩や昼の散歩が可能であり、会議と休息の時間帯がうまく入れてあることも一つの特色とされています。

**2 建物は、明治10（1877）年頃に創業。平成8（1996）年まで、山口の遊覧館として、井上隆、伊藤博之、佐藤崇作ら時代を担った人々が流れ、広く親しまれてきた。現在、池田（水城かすて）を発展させたもので、井上隆、佐藤崇作らが、日本の歴史に深く関わった数々の人物が改めて展示された。
間を分けることは、いろいろな意味で、
おもしろい試みですが、湯田温泉→会
場のシャトルバスに乗ることができな
かった方もいらっしゃったようで、申し
訳ありませんでした。
さて、会議に話を戻します。新しい
フェーズの始まりとなるべく、初日に
特別講演として有川節夫九州大学総長
にこれまでのご研究、関わって来られ
た研究プロジェクトを中心にして、教
育の方針、研究の進め方など、若い研
究者へのエール、研究の進め方への心
がけなどの参考になるご講演を行って
いただきました（図10）。また、海外
から参加されている方のために、図10
でもわかるように英語のスライドも準
備していただきました。AIの歴史を追
ったり、いろいろ示唆にとんだ講演で
したが、残念ながら、諸般の事情によ
り、本講演は学会誌に掲載できません、
申し訳ありません。
さて、本大会では、これまでの大会
のご意見や筆者自身の感想を反映させ
てテーマを設定しただけではなく、新
しい試みをいろいろ行ってみました。
○会長、副会長によるオープニング,
エンディング
理事会などに出ない限り、学会会長、
副会長の生の声はなかなか聞くことが
できません。そこで大会の機会にご自
身の考え、大会の総括、今後の人工知
能の進め方などをご講演していただき
ました（図11、図12、お役職は全国
大会開催時）。
○大会期の延長
今年の一番大きな変更は、会期が3
日から4日になったことであると思い
ます。以前は5日だったと言われる方
もいらっしゃるかもしれませんが、そ
のうち2日間は、チェアトリアルや国
際workshopでした。ここ数年、毎年
のように役積みが増え、並列トラックが
増えて聞きたい講演を聞くことが難し
くなったという声に対する対策でもあ
ります。確かに、4日間すべてに参加
するには、いろいろ支障があると思
います。授業のために一度大学に戻った
方もいらっしゃったようです。しかし
ながら、4日にすることで、400件を超
えた今年の発表に何か対応でき、
それに伴い、いろいろ興味深い企画を
入れることもできたと思います。
○複数の施設の利用
前略のとおり、メイン会場として、
近接しているといえども、数地を違う
独立した3つの施設（図13、図14）。
さらに、移動に不便を感じた方もいら
っしゃったとも聞くかやや離れた2施設
を使いました。このようにやや離れた
複数の施設で大会を行ったのも初めて
の試みです。都内ですから、100人程度を
収容できる部屋を複数確保するのは
難しいのに地方であればおさらいです。今回は、そんな中、それぞれに、100
人以上を収容できる部屋を多数確保で
きました。また、クリエイティブスペ
ース赤れんが*3のような、歴史的建物
でありいろいろ目的に応じてアレンジ
できる場所（図15）や、山口あふるさと伝承総合センターにあるみやび館*のような和室（図16）を使すことで、議論の活性化につながるのではないかという思いもありました。ちなみに、和室で人工知能などの会議を行うということは、日本といえば、例は少ないと思います。確かに、移動の不便があり、プログラムも移動時間を考慮したものにしないといけなかったのですが、会場の移動の間に一の坂川（図17）沿を歩くなど会議以外でも楽しみを味わっていたかたと思われます。ただ、気持ちの良い午後に満足して会議に戻ることを忘れそうでもありましたが、和室の利点に関しては、筆者が見たセッションでは、海外から来た方も含めて時折入ってくる自然の涼しい風を気持ちよさそうか、皆リラックスして参加していたようと思いました。

将来的には、さまざまな建物を有機的に組み合わせることで街全体もしくは、一部を会議場として使う企画も良いものです。

*3 明治36（1903）年製立図書館が開館し、戦後の増改築に伴って、大正7（1918）年に赤れんが造り3階、建築面積141.08 m²の書庫が増築されている。設計は長町啓之、施工は大谷組で、いずれも図書室を建設した関係者である。れんがはイギリス産のもので一見シンプルさが好まれるが、細部に凝った図書が見られる。

*4 山口の代表的な家家である明治24年に入居された豪族・美髙家の旧宅を一部移築したもの。

それが導入してみました。今年、オーガナイズセッションは大会において、非常に大きな位置を占めています。どのセッションも活気があり、先進的な話題が議論されていると思います（一般セッションがダメと言われているわけではない）。それの英語版です。

かつては月曜、火曜に国際workshopがありましたが中断しています。英語のセッションがなくなってしまうと、海外の人の参加理由が見つかりにくいのです。個人的には、日本の人工知能のレベルは高いので、それを海外の人にアピールする機会があるといいと思っています。

国際オーガナイズセッションとすることで、海外の人と交流するとともに、わずかでも日本の人工知能も知っていただくことができました。筆者が見たセッションでは、未曽有の議論ができていたと思います。本誌にその報告がありますので、そちらをご覧になって下さい。

国際オーガナイズセッションを継続するには、問題山積ができれば、継続していただけます。これに伴い、招待講演などに英語通訳を入れたいと思っていますが、準備不足で断念しました。その代わり、浅田綾大教授には、英語で講演していただきました（図18）。人工知能学会で日本人が英語で講演するのは初めてだと思いますが、海外から参加
された方はこれを聞くことができただけでもラッキーだったのではないでしょう。なお、本講演は質疑を含めてすべてが本特集に掲載されていますので、そちらをお楽しみ下さい。

○地元へのアピール
福祉会館が会場であったこともあって、福祉関連の研究を『特別企画「近未来チャレンジ卒業記念インタラクティブポスター展示～社会に寄与するAI」』として、ポスター展示をした（図19）。しかしながら、事前の言伝などが行き届かなかった、諸般の事情で、展示スペースとして人が多く通る場所を確保できなかったなどの理由と思われますが、ちょっと残念な結果となってもまだでした。展示をして下さった方は申し訳なかったのですが、今後このようなアピールは続けるべきだと思う。

これからの福祉を担う研究という意味もあり、以下に展示内容を示します。
- 西村拓一（産業総合研究所）ほか：介護・看護現場での間接業務を圧縮する情報処理技術
- 大島千佳（佐賀大学医学部地域医療科学教育研究センター）ほか：常岡言語を音楽により聴覚するシステムの構築に向けた試用
- 大川栄実（千葉大学）ほか：複数の施設で利用可能な共感法支援システム「ほのぼのパルネ」の開発

○オーガナイズドセッションに会場の選択権を渡した
さまざまな形態の会場を選択できたので、オーガナイズドセッションに会場の選択をしていたいて、部屋こきでセッションの運営をしていただくことを考えました。個人的には、会場の形態をうまく利用して、セッションを有機的にできるのではないかと考えました。いかがでしたでしょうか？

ちなみに、近未来チャレンジのオーガナイザからも、この選択権が欲しいといわれたので、来年の課題としてあげておきます。

また、相澤彰子さんが前号（Vol.27、No.5）の巻頭言で書かれいましたが、選択権を与えたことで、プログラムの構成に苦労されたとか…両方の側もしかしけりませんが、魅力的なセッションを有する会場の選択も必要ではないかと感じました。

○Welcome reception
今年は、Welcome receptionを行ってみました（図20）、こちらには余裕はかせず、さらに2会場に分け行って行うので、飲物などの提供が少なくアリと人間になってしまう志强の意願が開かれた話が交換され、交流の場と捉えてごらん下さい。特に、大会主のプログラム事前に詳細に見るとここはほぼ難しいので、おもしろそうな発表などの情報交換がしつこいと思いました。さらに、日を流れるお坂川で星を見ることができればという思いもありましたが、皆さん見ることはできでしょうか？筆者は、Welcome receptionのときは見られませんでしたが、交流会の帰り見ることができました。
○学生企画
学生企画に関しては、今年は、独立したストロットとしました。人工知能の将来を担う学生さんに寄与したい企画をしていただいていますので、多くの方に参加していただくことを、シングルストロットとしました（今号 pp. 709-712参照）。

○インタラクティブセッション
インタラクティブセッションは、昨年から復活させたものです。以前、ポスター発表がありましたから、展示しているのかどうかわからない状態でしたので、昨年から、ほかのセッションを休止して、シングルストロットで行っています。ちなみに、西田豊明前会長が大会プログラム委員長のときにデジタルポスターセッションを始めたと記憶しています。当時は、パソコンのパワーやプロジェクトの機能も上がり、このようなセッションはしやすくなっています。

さらに、去年同様、議論の潤滑油として茶業も用意しました。今年は、コーヒーや山口名物の外郎を用意させていただきましたが、気が付かれたでしょうか？

また、インタラクティブセッションは、オーラルリッチに追加料金なしで行えるようにしています。参加者とじっくり議論する機会もつことは重要です。恐らく、来年も継続できると思いますので、参加者はこれを十分に活用されるとよいでしょう。ただし、今年は、参加者数の見積もりをかなり誤っています。なかった部屋が狭くなって、参加者には不便をおかけしたと思います（図22参照）。もちろん、皆様の活発な参加は大変うれしいことですので、来年以降も多くの方に参加していただけると幸いです。

このように、初めての大会実行委員長であり、前年度の実行副委員長としてのOJTの経験をうまく生かせなかったところもありますが、とにかく、第二十四世の始まりとしてのさまざまな試みを行い続けてみたのです。

今年は、訪問者数で、全体の内、メニューや周りがわかりづらくなっているという意見もありますが、皆様からのご意見をいただくことで、全国大会は進化していくと思います。今後とも暖かい目でご支援ください。

また、今後もこの企画を続けてゆきます。全国大会は進化しています。単なる研究発表会ではなく、参加すると、人との交流等、さまざまな意味での有益な体験ができると思います。

最後になりますが、参加して会話を盛り上げて下さった800名を超える皆様に感謝いたします。また、大会委員として、本務も忙しい中、大会を運営して下さった大会委員の皆様、細かいところまで気配りのある大会支援をして下さり、特に我々だけでは恐らく対処できなかった辻路バスの運行など、山口県側のさまざまな問題を解決して下さった山口大学の　　師　　三村さん、学会委員でもないのに大会ローカル委員をお願いした漸川　　人氏、さらにサポートして下さった阿歳　　茂樹さん、曹長、受付、設案内などい　　りいろいろしていただいた山口大学の学生　　さんたちに大変感謝いたします。

そして、山口コンベンション協会の　　川　　寺　　さんの多大なるご支援に感謝いたします。大きな要望を有する施設の提案、確認や相談すべき担当者の示唆をしていただき、さらに、会議を意　　義深く行うために筆者が投げかけるさまざまな無理な要求を迅速、適切に解　　決していただきました。彼女の献身的　　な協力なしには、本大会は成功しなかったと思います。

来年は、6月4日（火）～7日（金）にかけて富山県富山市で開催されます。さまざまな趣向を謳唱し、準備してい　　ますので、皆様、ぜひご参加下さいま　　して、今年の人工知能を体験して下さってください。

著者略歴

阿部　明典（正会員）
1986年東京大学工学部電子工学科卒業、1991年同大学院工学系研究科電子工学科工学専攻博士課程修了、工学博士。同年、NTT入社、NTTコミュニケーションシステム研究所基礎研究所、NTT MSC（マーシア）、ATR知識科学研究部等を経て、現在、千葉大学文学部行動科学科教授、アドバイザー　　などの人工知能の研究を行っており、最近では、ことば工学、チャシス発見に焦点を置いて研究　　している。電気情報通信学会、社会情報学会、各会員。